

幻想郷の魔法の森。そこに住んでいる普通の魔法使い。霧雨魔理沙。

魔法店を営んでいるが、何を思ったのか改装して喫茶店を開いたらしい。

魔法の森にただの人間は寄り付かない。

しかし、迷い込むこともあるだろう…そんなときに立ち寄れる事を願おう。

霧雨喫茶店 ～ Welcome to Marisa's Cafe ～

※この小説は東方projectの二次創作です。

原作サークル・上海アリス幻楽団さんとは一切関係ありません。

## 目次

## 0. プロローグ

事の発端。

## 1. 異次元の夢

店主が見た夢は不思議だった。

## 2. お酒の大好きな御伽の鬼

小さな百鬼夜行がやってきた。

## 3. 星の器のティーセット

店主が選んだ、自慢の器。

## 4. 金の無い巫女の襲撃

博麗の巫女の襲撃。

## 5. 魔法の夜

実はまだお昼頃。

## 6. 金は払うから本は返して

動かない大図書館ご入店。

## 7. 恋色の閃光

輝くのはカップの光。

## 8. 血の様な赤い赤いお茶

永遠に赤い幼き月とその従者も入店した。

## 9. 魔女達の憩い場

魔女は実質一人だけ。

## 10. 人形少女のお茶会

七色の人形使いがやってきた。

## 1 1. 東洋の夜間飛行

幻想郷も東洋になります。

## 1 2. 芥川龍ノ介の喫茶店

水の中のエンジニアがやってきた。

## 1 3. お酒と鬼と電子のお囃子

みんなで楽しく談笑。

## 1 4. 星空のティーカップ

閉店後のお話。

あとがき



## 0. プロローグ

暑さも落ち着き、蟬よりもヒグラシが鳴き始めた晩夏の昼下がりに。

霧雨魔理沙は知人の森近霖之助が営む道具屋・香霖堂に来ていた。

「なんか面白そうなものはないのか？」

魔理沙はめぼしいものが無いか、勝手に棚を漁る。

「君ねえ…勝手に弄るのは止めてくれとあれ程…」

霖之助は呆れながら魔理沙が落とした物を拾っていく。

「お？これは？」

魔理沙は何やら取っ手の付いた小さな箱が付いた物を見つけた。

「それは…たしか、コーヒーマイルだったかな？たまたま僕も使うんだ」

霖之助は拾ったものを棚に戻しながら、魔理沙に説明した。

「コーヒーミルう？」

聞きなれない名前に顔をしかめる魔理沙。生れてこの方聞いたことが無いそんな顔。

「幻想郷にはあまり流通していないが、コーヒーというものを飲むときに使うんだ」

霖之助は魔理沙からコーヒーミルを没収し、カウンターに置いた。

近くの引き出しから何かが入っている袋を取り出した。

「なんだそれ？」

魔理沙は袋の中身に興味を示した。キリマンジャロと書かれている茶色い小袋。

「これはコーヒー豆。このコーヒーミルで豆を挽くんだ」

霖之助がウキウキとコーヒーミルの蓋を開け、コーヒー豆を入れ、ゆっくりと回し始めた。

ゴリゴリと静かに音が鳴り響いた。

「ほーん。んで？」

魔理沙は特に派手な事が起きないのでつまらなく感じてきた。

「まあ、見てなつて」

霖之助は魔理沙をなだめ、お茶を飲むように沸かしていたやかんを近くに置いた。

口の狭い透明な容器を取り出し、何やら紙のようなものをかぶせ、そこに先ほど挽いた豆をスプーンで数杯入れた。

最初は少しだけ、お湯を注ぎ、しばらくしたらゆっくりとお湯を注ぎ始めた。

容器にはゆっくりと茶色い液体が注がれ始めた。

「おおー。なんかすごいな」

魔理沙は興味津々で様子を見る。お茶とは違う事はわかったが、外の世界の飲み物は珍しいモノもあるのだと思った。

「さて、こんなもんな」

霖之助はお湯をある程度注ぎ、注ぐのをやめた。

湯飲みを二個用意し、容器の茶色い液体をそれぞれに入れ始めた。

「砂糖は入れるかい？」

霖之助は少しだけ自分の湯飲みに砂糖を入れた。

「一回このままで飲んでみる」

魔理沙は得体の知れないものだが、何事も挑戦なので少し飲んでみた。

霖之助も同じタイミングで飲み始めた。

「につが！…うへえ…よく飲めるな…」

魔理沙は文字通り苦虫を潰したような顔をした。

「はい。砂糖」

霖之助はほらみろと言わんばかりに砂糖の入った容器を渡した。

「おう。すまん…」

何杯か入れる魔理沙。ニヤニヤと笑う霖之助。やはり子供だなと言いたげな顔。

「な、なんだよ……」

霖之助を睨む魔理沙。なんとなく失礼な事を思っているなど睨んだ。

「別に」

霖之助は微笑みながらに近くの椅子に座った。

「むー……」

恥ずかしい一面を見られた魔理沙は少しふて腐る。

「……」

霖之助は烏天狗からの新聞を読み始めた。

魔理沙はまだふて腐っていた。暫くの間、静寂が流れた。

「あ、そうだ！喫茶店やるか！」

魔理沙は突然声を上げ、満面の笑みで霖之助を見た。

「え？」

驚く霖之助。いつも突拍子もないが、今回は特に驚いた。

他人と仲良くするのが苦手な彼女にできるのか心配になった。

「まずは、魔法店の改装して、必要なものもそろえないとな！」

魔理沙の瞳は爛々と輝き、星のような瞳だった。

「僕の知識でいいなら、ある程度はそろえよう……」

たじろぐ霖之助。そう言わざる得ない顔だった。

(つくづく甘いなあ……)

そう自己嫌悪する霖之助。

「んじゃ！よろしく！！」

魔理沙はそそくさと香霖堂を後にした。

「あ、うん」

見送るしかない霖之助。

この後、大量の品物を（永久的に）レンタルされる事になるとは思っていなかった霖之助。